

春を待つ

生涯を通して、多くの花の絵を生み出した三岸節子。彼女が最晩年に描いたのは、大きな桜の木でした。そこに至るまでの画業の軌跡を辿ります。



《花・果実》1932 ©MIGISHI

室内画、静物画への思い

「じつと座つてゐることが好き。考へることが好き。冥想する癖。静物ばかり描くのは生来の性癖の為す業かもしれません。」^(注1)

これは、1945(昭和20)年、40歳の節子が記した言葉です。後にフランスへ渡り、ヨーロッパ各地を巡って風景画の数々を生み出すことになる画家の言としては、少々意外なものかもしれません。先天性股関節脱臼を患っていたこと、また夫・三岸好太郎(1903-1934)を早くに亡くし一人で三人の子育てをしていたことなどから、頻繁に戸外へ出ることは難しかったため、節子の初期作品の多くは、室内の身近なものをモチーフとしていました。「要は見馴れた生活の断片ですが、そのいずれの部分にも生活の体臭がしみこんでいる、愛情がゆきとどいているという絵を描きたかったのです。」^(注2) と語るように、その室内画・静物画には、身近なものへのあたたかな眼差しが込められています。節子の「花」は、画業初期に静物画の卓上のモチーフの一つとして登場し、やがて作家を代表する主題へと昇華していきました。

日本で、世界で描く「花」

63歳になり二度目の渡仏を果たすと、ヨーロッパの風景に魅せられた節子は、風景画家として本格的に開花していきます。1974(昭和49)年にブルゴーニュ地方の小村、ヴェロンにアトリエを構えて以降は、ここを拠点として、長男・三岸黄太郎(1930-2009)の運転する車でヨーロッパ中を巡り、気に入った場所があればスケッチをしました。

風景画家として躍進を続けながらも、常に身边には自分で活けた花を置き、描くことを続けていました。「私は花の作品を描きつづけてをります。大東亜戦争の間も、花ばかり描いてをりましたし、静物や鳥や風景を描くかたはら、終始変わらず、花の作品を描いてをります。生涯、花の作品は私の制作対象から逃れることはありませんまい。」^(注3)と、画家自身にとって「花」が重要なモチーフであることを語っています。



《白い花(ヴェロンにて)》1989 ©MIGISHI



《花》1952 ©MIGISHI

節子の仕事に最も間近でふれてきた、長男で画家の黄太郎は、世界各地で描いた節子の「花」について、このように言ったということです。「せがれが私によく、驚宮で描いた花は驚宮的だ、軽井沢で描いた花は軽井沢の花で、大磯で描けば大磯、ヴェロンで描けばヴェロンの花と、その土地の花を描くと申しますんです。私は全然気がつかないんです。ああ、そうかなと思うだけで。環境の特色が花に非常に出てくるそうです。」^(注4)「花」は、節子にとって生涯をかけて不変に追いつけるテーマでありながら、またその時々々の環境や心情の変化を映し出すモチーフでもありました。

最期に描いた花、「桜」

1989(平成元)年84歳で帰国した後、大磯のアトリエで制作を続けていた1994(平成6)年には、女性洋画家初の文化功労者となる偉業を達成します。これを受けて1998(平成10)年に大規模な回顧展がパリで開催され、新作《さいたさいたさくらがさいた》が出品されると、国内外で大きな反響を呼びました。異国で20年以上の歳月をすごしてきた節子が最晩年に描いたのは、日本の多くの画家たちが取り組んできた「桜」だったのです。「生命に執着し、執念を燃やす怖さが描けなければ、本当の桜を描いたことにはなりません。今の私なら描くことができます。美しさと怖さとを。」^(注5) という覚悟をもってこの作品を描き上げた翌年、節子は94歳で世を去りました。生涯をかけて「花」というテーマに取り組んできた節子の、70年以上にもわたった画業の集大成ともいえるこの作品は、現在、節子の希望により当美術館のメイン作品として収められています。



《さいたさいたさくらがさいた》
1998年 ©MIGISHI

(注1) 三岸節子『花より花らしく』求龍堂、1977年、p.17

(注2) 三岸節子『三岸節子自選画文集 花こそわが命』求龍堂、1996年、p.32

(注3) 三岸節子『花より花らしく』求龍堂、1977年、p.55

(注4) 三岸節子『三岸節子自選画文集 花こそわが命』求龍堂、1996年、p.114

(注5) 吉武輝子『炎の画家 三岸節子』文藝春秋、1999年、p.379